哀原

古井由吉

原

古井由吉

文藝春秋

© Yoshikichi Furui. 1977

哀原

昭和五十二年十一月二十五日　第一刷
920円

著者　古井由吉
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社　文藝春秋
郵便番号（102）
東京都千代田区紀尾井町三
電話（〇三）二六五―一二一一
印刷所　精興社
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《目次》

哀原……5
雫石……35
仁摩……65
人形……89
櫟馬……113
赤牛……139
安堵……173
女人……203
池沼……223

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

哀

原

哀

原

原っぱにいたよ、風に吹かれていた、年甲斐もない、と友人はおかしそうに言う。見渡すかぎり、膝ほどの高さの草が繁り、交互に長いうねりを打っていた。風下へ向って友人はゆっくり歩いていた。夜だった。いや、夜ではなく、日没の始まる時刻で、低く覆う暗雲に紫色の熱がこもり、天と地の間には蒼白い沼のような明るさしか漂っていないのに、手の甲がうっすらと赤く染まり、血管を太く浮き立たせていた。兇器、のようなものを死物狂いに握りしめていた感触が、ゆるく開いて脇へ垂らした右の掌のこわばりに残っていた。いましがた草の中へふと投げ棄てたのを境に、すべてが静かになった。

雨はまだ落ちていなかったが、服は内側からしっとり濡れていた。地面は空よりも暗く、草の下に転がる得体の知れぬ物がたえず足に触れたが、足はもう躓きも立ち止

まりもせず、陰気な感触を無造作に踏みしめて乗り越えて行く。そのたびに身体がただ重くなる。しかし風が背後でふくらんで、衰えかけてもうひと息ふくらむとき、草は手前から順々に伏しながら白く光り、身体も白く透けて、無数の草となって流れ出し、もう親もなく子もなく、人もなく我もなく、はるばるとひろがって野を渡って行きかける。野狐が人間の姿を棄て、人間の思いを棄て、草の中へ躍りこむのも、こんなものなのだろうか、とそんなことを友人は考えたという。

夢だったのだろうね、と私は毎度なかば相槌のような口調で答える。あの七日の間、友人はそんな草深い所へは行っていないはずだった。連夜私の家へかけてきた電話には酒場のざわめきがこもっていたように聞えた。二度目の電話のあとで私は友人の細君から問合せを受けて、彼が一昨夜から家にもどらないこと、肺癌の宣告を受けていて、しかも若いだけに早くも初期段階を過ぎていることを知らされた。今まで堪え性の強かった人だけに、こうなったら好きなようにさせてやりたい、女の人のところへ行ってもいい、ただひと声でも声を聞きたい、ひと言でもやさしい言葉をかけてやりたい、と細君は気丈に言ったが、しかし夫から電話が来れば、お互いにもう病気のことを話すよりほかになくなるだろうことをおそれていた。

三日目の晩から私は電話の来るのを待ちかまえていて、とにかく居場所を教えてくれ、奥さんには言わずにすぐに飛んで行くから会ってくれ、とひたすら呼びかけた。ところがそれにつれて、友人の話すことはだんだん尋常でなくなってきた。なにか大きな罪を犯したようなことをぼそぼそとつぶやいていたかと思うと、急に興奮して、お前は人を殺しておきながらそのことも忘れて平然と生きながらえている、というよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

うなことを言って私を責める。かと思うと、夜中にまた電話をかけて来て、すっかり和んだ声であれこれ取りとめもなく話し、ようやく気持が静まってきたのでまもなく帰るから、皆にそう伝えてくれ、と頼んだりした。

仏はつねにゐませども、うつつならぬぞあはれなる……とそんな歌を口ずさんでいることもあった。

暗い野原で風に吹かれていた話を最初に聞かされたのも、夜中の電話だった。今度こそは帰ってくる、と私はその後でなぜだか静かな確信に満たされて床にもどったが、明け方近くに目を覚まし、ほんのしばらくの間ではあるが身をこわばらせた。あの男、ひょっとしてほんとうに人を殺して、ひょっとして心中の片割れとなって、うろつきまわっているのではないか、と考えた。友人の妹が十何年か前に男と心中したことからの連想ではあった。一日おいて、朝早く友人は腑抜けのようになって家に帰り、その日のうちに病院に入れられた。するとまた次の朝早くに女性が私のところへ電話をかけてきて、もしもの時にはまずここへ連絡するよう彼に言われたとことわり、一週間前から気の触れた彼を付ききりで守っていたところが、昨日の明け方近く、落着いた様子なので自分もつい深く眠りこんだその隙にアパートを抜け出されてしまった、まる一日待ってももどらない、自殺のおそれがある、と涙声で訴えた。とうに自宅に帰った旨を私は教えた。そうなんですか、と女性はつぶやいて、受話器を置いてしまった。

夢なんだろうね、と友人はまた笑う。自分があの七日間に何をしたか、覚えがないとは、俺は言わんよ。今は細かいことを思い出せないが、だからと言って、責任を逃

れはせんよ。女のところへ逃げて、また女房のところへ逃げてきた、どちらかを疎んだその分だけ、どちらかへ惹かれる、ということではないんだ。申し開きはできないが、かならずきちんと思い出す、始末をつけるということではなくて責任を負う……。

死病の床に就いた男のそんな言葉に、私は思わず目を逸らす。病気のことについては、友人は入院の三日目に細君をベッドのそばに坐らせ、お互いにもう隠すのはやめよう、わかるだけのことはわかっているのだから、もう何も言うな、隠さずに黙っていよう、と戒めるように言って、泣き出してしまった細君の背をいつまでもさすっていたという。自分の死後の、おもに経済的なことについて、できる範囲の指示を記したものを、すでに細君に渡しているという。しかし私の前では、長い病いからようやく回復しつつある人間の口調でしか話さなかった。

二十代三十代とほとんど変りのなかった髪がいつのまにか生え際から白さを増し、しかもどういうわけだか以前よりも細く柔かく流れるように見えた。顔からは男臭さが消え、どうかすると、少女のような、老女のような面立ちが透けて見える。しかし目には、衰弱の薄膜の下に、澄んだ力がこもっていた。

厄年というのはあるもんだね、と友人はそんなことをつぶやく。危険な話題に私は尻ごみしかけるが、相手の回復者の口調はやはり破れていない。人さまざまなのだろうがね、と友人はことわってから、ぽつりぽつり話し出す。一年ほど前から身体がときどき、前触れもなしに、強い悲哀感におそわれるようになった。感情というよりはもっと肉体的な、疼きに近いものだ。さしあたり、ことさら哀しむべきことは思い当らない。いまさら何を恨むでもない。憂愁というものともまるで違う。膝頭が声をこ

ろして泣いている、みぞおちが嗚咽している、と言えばおかしいだろうか。たとえば向う脛を物に打ちつけて、息をつめて痛みをこらえていると、痛みの奥から全身にひろがってくる、あの泣きたくなるような虚脱感にも似ている。魂が抜け出そうとしているのではないか、それで身体が自分の重さに泣いているのではないか、と戯れに考えたこともある。

そんな発作が最初のうちは何日かに一度、やがて毎日のように、しまいには日に何度か、時と場所を選ばず、会議中とか女房子供たちと食事の最中にまで起るようになった。一瞬、その場にうずくまりこんでしまいたくなる、そんな烈しさが、悲哀感の差しこみがある。しかしそうなるとよけいにきちんと振舞い、きちんと人に受け答えしているのが、自分でもわかる。こうして人にたいして外面を守ってきた、外面を守るのが情愛だった、これからも守りつづけるだろう。生涯繰返しても泣きは入れない。そう思いながら、いま現在こみ入った仕事の話を人とてきぱきやりとりしている自分自身が、子供たちの話しかけるのに答えている自分自身が、すでに遠い記憶の情景のように眺められ、その懐しい思い出に向って手を差しのべながら、何かが身体の奥でずるずると沈んでいく。おそらく子供たちの目には、いまの自分がいちばん頼りになる父親として映っているのだろう、とそんなことを考える。

夜明けに目を覚まして、涙を流すわけではないが、五体がようやく泣き疲れて静まっているのを感じることがある。哀しみではなく、むしろ懐しさに近い気持だ。荒涼とした風が西の地平から吹きつけてくる。十歳の時に母親を亡くして、地平の一劃がぽっかり明いてしまい、それから何年かというもの、毎夜床に就く時と寝覚めする時、

そこから風の渡ってくるのを肌に感じた。熱っぽい身体に悩まされるようになった年頃にも、まだ吹いていた。隣の寝床では四つ年下の妹が幼い頃から喘息に傷めつけられた喉を、細い笛のように鳴らして眠っていた。

二十過ぎに父親が七転八倒の末に息を引き取り、二度目の母親もまもなく再婚して行った家で二年と経たぬうちに急死した。それを便りに聞いた夜、西の地平は相変らず明いていたが、風はとうに吹きつけなくなっていた。男と一緒に死んだ妹もそこへ吸いこまれてしまい、耳馴れた咳の声ひとつ、渡って来なかった。静かだった。その静かさの中で、結婚して子供をこしらえた。その静かさのために、親子の暮しという当り前がたえずどこか奇蹟のように感じられたので、日常の繰返しに倦むなどという贅沢は知らなかった……。

それはどうだろうか、と浮びかける疑問を私は頭の隅に抑えこんで、傾聴のかたちを取りつづける。この男の《女癖》について私は多少知るところがある。女と遊ぶ男ではない。そのつどのめりこみ、のめりこませ、もう長年愛憎を閲したような感じで寄り添わせ、ひと月ふた月でふっつり逢わなくなる。あの人は近頃どうなってしまったのでしょうか、とそのうちの何人かの女性に私は呼び出され、友人の保護者のような口調でたずねられた。どれも三十前後の、目のやや陰気で賢そうな、思わず外へ詫びるような笑みを浮べる女で、私がいままでの関係を知るかぎり話すと、怒りもしないで淋しそうにうなずいて、はっきりと執着が見られるのに、その後友人にすこしもつきまとった形跡がないのは不思議だった。どれも友人の細君と感じが似ている。友人のほうはそんな関係を何度重ねても、馴れや崩れが出て来ないばかりか、心が分裂

するという痛みも知らぬふうだった……。

厄年というのは思春期よりも生命が柔かくなって、生命の被膜が薄くなる時期なんだ、と友人はやはり回復者の口調でつづける。その不安定さを本人が逆にいよいよ硬直のしるしと取るものだから、生命が裸出していることに不用意なものだから、よけいに侵されやすくなるんだ。この二、三年の間に生命が最後の脱皮を行なって、死病を核に取りこんで、ようやく調和の取れた老いに入って行くんだよ。

そこまで言われると私は友人の胸の内をまったく感じ分けられなくなる。現に死病に取り憑かれていると自分で知っていながら、このような淡々とした言葉は、健康な人間を前にして恨みやら恐怖やらを静めようとする努力から来るのだろうか。それともすでに我身ひとつの生死を超えた境地に入っているのだろうか。それとも、見かけは静かでも内は狂ったままなのだろうか、恐怖感と一緒に現実感までが意識から剝離してしまったのだろうか、と私はそこではじめて、たえず困惑しているような笑いをうっすらと浮べている顔を一方的に眺めてしまう。七日ぶりに玄関先に立った夫の姿の中で細君をまずびっくりさせたという髪の根もとの白さが、あらためて迫ってくる。胸の呼吸の忙しさが、ベッドに横になっていても、目につくようになっていた。

そのうちに、私はあの七日のあいだ友人をアパートに泊めて保護したという女性と話す機会を得た。

やはり三十すこし前の、地方の親もとから見限られ、自立して暮す賢そうな女性だった。友人との関係が始まったのは二年も前のことで、ふた月ほどは毎週のように外で逢ったり部屋へ来てもらったりしていたのが、或る日を境に、彼女から見れば何の

前触れもなしに、友人は電話を寄越さなくなった。こちらから勤め先のほうへ電話をすると、今週は忙しいので来週になったら連絡する、と逢っていた時とまったく同じ口調で答える。彼女のほうも人に迫ることのできない、迫られていると感じさせるのが厭な性分なので、ときたま声を聞くだけの電話に限るようになり、しつこくもしなかったのに避けられたことを一人で苦しんで、電話のある部屋へもどるのがつらくて、生活のほうも多少荒れ、一時は顔つきが変るまでになったものだけれど、不思議に彼のことを深くは恨まなかった。それよりも、自分には男女のことはよくわからない、好きな人にほんとうに執着することができない、と感じて悩んだ。

そのまま一年あまり経って、気持も落着きかけた頃、或る晩、友人はアパートに電話をかけてきて、近くまで来ているのだけれど寄ってよいかとたずね、三十分も待っていると、疲れはてたような顔つきで入ってきて、ああ、ここはやすまる、と彼女のそばに寛いだ。彼女のほうも胸の底からほっとして、その間のことを忘れてしまった。彼の来訪は月に一度の間隔を置いて、規則正しく繰返されるようになった。彼は彼女の身上話を細かに聞いてくれる。彼女は他人に自分のことをめったに話さないほうで、自分でも自分の過去にひどく冷淡だったのが、彼に導かれると、自分でこうも驚くほどいきいきと身上を話せるようになり、厭な自分がそのぶんだけ愛せる気になってくる。彼は宵の口にやってきて、夜中の一時を回ると手早く身支度を整え、若い人のような軽い身のこなしで帰って行く。彼女は別れ際に粘りつかないように心がけて、話を聞いてもらっている時の気持のまますぐに眠りにつく。明け方にかならず目を覚まし、蒼白くなって行く部屋を見ているうちに、自分が鬼のようなひどい顔になってい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.